令和元年度

「少年の主張」全道大会

発表作品集

公益財団法人北海道青少年育成協会
北　　海　　道
独立行政法人国立青少年教育振興機構

目　次

はじめに

公益財団法人北海道青少年育成協会会長　竹谷　千里 …… 1

令和元年度「少年の主張」全道大会 …… 2

作品集

【最優秀賞】

「命をいただく」ということ　小路　藍花（登別明日中等教育学校３年）…… 4

【優秀賞】

普通　吉田　千玲（帯広市立帯広第四中学校３年）…… 5
「いじめと僕の夢」　谷内　楓（岩見沢市立清園中学校２年）…… 6
過去を乗り越えて　房田　心玖（北斗市立茂辺地中学校２年）…… 7

【奨励賞】（発表順）

夢をかなえる　五十嵐彩佳（江別市立野幌中学校３年）…… 8
「アウトドア、そして家族」　岸本　慶介（札幌市立宮の森中学校３年）…… 9
強い意志をもって　佐藤志保里（江差町立江差中学校３年）…… 10
なりたい自分になるために　鈴木　佑（礼文町立香深中学校３年）…… 11
小さな一歩　矢野なずな（新冠町立新冠中学校３年）…… 12
さびしさを大切に。　土岐　羅求（根室市立柏陵中学校３年）…… 13
思いやりの先に　山森　隼人（美幌町立北中学校３年）…… 14
あいさつの力　関根　璃音（白糠町立庶路学園９年）…… 15
当たり前を常識に　岡野　心優（旭川市立神居東中学校３年）…… 16
なりたい自分になるために　斉藤　夏華（苫前町立古丹別中学校２年）…… 17
十年後の私へ　堀　来羽（喜茂別町立喜茂別中学校３年）…… 18
情報発信の大切さ　野月あすみ（札幌市立星置中学校３年）…… 19

講　評

審査員長　立花　和実（北海道中学校長会幹事／伊達市立伊達中学校校長）…… 20

参　考

令和元年度「第41回少年の主張全国大会」～わたしの主張2019～内閣総理大臣賞受賞作品 …… 21

資　料

大会のねらい／大会のあらまし／審査員 …… 22
令和元年度「少年の主張」総合振興局・振興局地区大会開催状況 …… 23
令和元年度「少年の主張」実施要領 …… 24

「少年の主張」全道大会　歴代最優秀賞並びに優秀賞受賞者名簿 …… 26

はじめに

「少年の主張」全道大会は、昭和54年の国際児童年を記念して始められ、今回で、41回目を迎えました。ここに作品集を発行し、皆様にご覧いただけることを大変うれしく思います。

この大会は、人格を形成する上で重要な時期にあたる中学生が、日常生活を送る中で感じ、考えていることや未来への夢、希望などを中学生自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、同世代の中学生に周囲の人々や社会との関わりについて、より深く考えていただき、社会の一員として自覚していただく契機とすること、また、道民の皆様が中学生の考え方、感じ方、意見等に直接触れることにより、青少年健全育成に対する理解と関心を深めていただくことを目的として開催しています。

今、少子高齢化、国際化、情報化等が急速に進展する中、青少年を取り巻く環境も大きく変化しています。そのような中で、彼らの主張に真摯に耳を傾けることは、私たち大人の責任でもあると考えています。

これからの北海道を担う、希望に満ちあふれた輝かしい存在である青少年の皆さんには、自分たちの意見を発表することを通じて、広い視野と柔軟な発想を育むこと、論理的に物事を考えること、自分の主張を他の人に正しく伝える力などを身につけて欲しいと願っています。

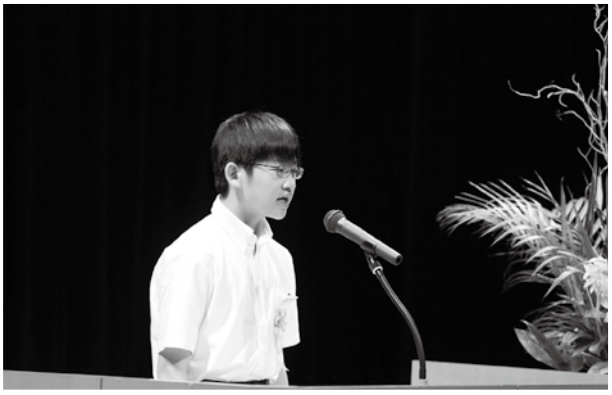
今年は、道内343校から33,890名の方が応募され、地区大会を経て、16名の方が全道大会に進まれました。この作品集は、その16名の皆さんの生き生きとした主張を掲載したものです。

この作品集を一人でも多くの方に読んでいただくことを願いつつ、本大会を開催するに当たり、ご協力いただいた関係の皆様に心からお礼を申し上げ、ご挨拶といたします。

令和元年12月
公益財団法人北海道青少年育成協会
会　長　　竹谷　千里

令和元年度「少年の主張」全道大会

令和元年９月５日（木）　札幌市　道民活動センター（かでる２・７）



令和元年度　北海道青少年育成大会
（令和元年度「少年の主張」全道大会）
つながりの牢獄

鈴木 直道
佐藤 嘉大
秋澤 敦道
竹谷 千里
立花 和実

令和元年度　北海道青少年育成大会
（令和元年度「少年の主張」全道大会）
主催　公益財団法人北海道青少年育成協会／北海道／独立行政法人国立青少年教育振興機構

最優秀賞　北海道知事賞

「命をいただく」ということ

登別明日中等教育学校３年
小路　藍花

私が今まで育ってきた環境は、科学技術が発達している今の時代ではめずらしいかもしてない。有機農業を営んでいること。無添加の食品しか食べないこと。そして「肉」は飼育している鶏や父が山で捕った鹿を解体して食べること。食卓に並ぶものは全て自分達で育てた有機のもので、それが私にとっては当たり前で普通のことだった。だから、小学校のおやつはみんなが持って来るようなカラフルで交換し合えるようなものではなく、当時の私は戸惑うこともあった。しかし、そこには両親の強い願いが込められていたのだ。「環境と体にできるだけ負荷をかけない暮らしをしたい」「未来の子供のために、自分の体も遺伝子も傷付けないようにしたい」そんな願いを持って両親は私を育ててくれた。この環境で育ってきた私だからこそ、強い思いを持って主張したいことがある。それは、私たちの命は多くの命で成り立っているということだ。

私が初めて鶏の解体をしたのは小学生の頃だった。両親や兄が解体するのを見てきたし、私も羽むしりなどを手伝ってきた。食べるために命をいただくこの光景は当たり前だと思っていた。しかし、鶏を実際に自分の手で殺し、解体するのは命の重さを直接に感じるものだった。首に包丁を当て、切ったときに硬直する鶏の筋肉。流れる真っ赤な血。死ぬ直前に必死でもがく姿。この全てが私に命の重さを突き付けてくる。五分前まで生きていた鶏が私の手によって、私の手の中で死んでいく。命の重さは計り知れない。

だからこそ、私たちはその命を少しも無駄にはしない。私には分かるのだ。命は繋がっているということが。肉となった鶏は私が食べることで血や肉になり、私という命を支えている。この経験が私に、繋がっていく命の重さ、食と命の密接な繋がりに気付かせてくれた。だから、みんなにも気付いて欲しい。命の重さ、食との繋がりに。

さて、コンビニエンスストアやファストフード、二四時間営業のスーパーやレストラン。食べたい時に、食べたいものが手に入る。そんな豊かさの一方で食品ロスの問題は深刻だ。今、日本全国で約六三二トンもの命が無駄になっている。その約半数は家庭から出たものだ。つまり、私たち一人一人が意識し合って生活できれば、捨てられるだけの命を減らすことができるのだ。その意識を持つために、忘れてはならないことがある。それは、私たち人間が自然と共に生きているということだ。豊かさの中で、このことはつい忘れがちだ。だから、平気で食べ物を残したり、美味しくない、食べたくないと言って簡単に捨ててしまう。もし、食卓に生きている鶏をそのまま出されたら、きっと誰もが食べるのを躊躇するだろう。そして、きっと誰もが簡単には捨てられない。なぜなら、生きているからだ。

しかし、想像して欲しい。普段食べている肉も魚も、命あるものだったのだ。形を変えただけで、その命の重さは変わらない。生きていたという事実は変わらないのだ。誰かが命を育て、そしてその命を奪うという行程の上に私たちの命は成り立っている。それを理解して欲しい。大切にして欲しい。

だから、私は「いただきます」「ごちそうさま」を欠かさずに言う。命をいただいているという立場で命を大切にしたいから。命に感謝したいから。

私は忘れない。私たち人間が自然と共に生きているということを。私は忘れない。私たちは多くの命に支えられ、新しい命を育んでいく存在なのだということを。

優秀賞　北海道教育委員会教育長賞

普　通

帯広市立帯広第四中学校３年
吉田　千玲

皆さんは「普通」ということについて考えたことはありますか。私達は、普段、自分と違う行動をとる人のことを「普通じゃない」と言ってしまうことがあります。でも、「普通」とは何なのでしょうか。「普通」の基準は誰が決めたのでしょう。そもそも「普通」なんてないのでは‥‥と思います。今日は私なりの「普通」について考えてみます。

私には二つ下の妹がいます。母によると、あやすと微笑む目の可愛い赤ちゃんだったそうです。外出すると、「かわいいわね」とよく声をかけられていました。しかし、妹は皆さんのいう「普通」ではありませんでした。妹は皆さんと同じようには話せません。はっきりと発音するのが難しいのです。漢字や計算を覚えるのにも私達の何倍も時間がかかります。運動も苦手です。

でも、できないことには理由があります。うまく話せないのは、言葉を音にして組み立てるのが苦手だからです。本当は多くの言葉を知っています。名詞や動詞、形容詞はもちろん、「暴力反対」などの抽象的な言葉も知っています。ただ、相手のスピードに会話のタイミングを合わせられないのです。なので、言葉を理解していないと思われがちです。伝えたい気持ちをたくさん持っているのに、言いたいことがうまく伝わらないのは本当に辛いことだと思います。こちら側が少し待ってあげればうまくいくこともあります。

運動が苦手なのは、体幹が弱いのと、協調運動が上手くできないからです。縄跳びで縄を回しながらジャンプするなど、二つの動作を同時に別々の器官で行うのが協調運動です。これは、日常生活でいつも無意識に行われています。言葉の発音も、舌と口の協調運動によってはっきりと話すことができるのです。

逆にすばらしい所もあります。家の中でスマホや鍵がなくなると、ほぼ百パーセント妹が見つけてくれます。神経衰弱も得意です。こんなにも記憶力があるのに学習に時間がかかるのは不思議です。きっと物の見方や記憶の仕方が人とは違うのだと思います。

今回、妹のことを友達の前で話すかどうか迷いました。受けいれてくれる人もいれば、そうでない人もいると思ったからです。でも、私は十二年間一緒に過ごしてきたからこそ、できないことをこちら側が理解して、接し方を変えれば「普通」だと思えることを、みんなに知ってほしく話すことにしました。

この春、妹は私と同じ中学校の特別支援学級に入りました。私のクラスの授業を覗いていたり、全校集会で静まり返っている中「ちあきぃぃぃ」と走ってきたりします。私に全校生徒の視線が集まって恥ずかしいと感じることも多々あります。そんな時、クラスのみんなが「お前、妹に優しくしてやれよ〜」と、私に声をかけてくれます。みんなが普通に接してくれるので、私はとても救われています。だから、みんなに話して良かったなと思います。

少し接し方にコツはいるけれども私にとっては普通の妹です。皆さんが「普通じゃない」と思う妹を私が「普通だ」と思えるように、感じ方は人それぞれなのです。自分と違う人のことを「普通じゃない」と思うのか、「普通だ」と思うのかは、相手ではなく自分自身の問題だと思います。

自分と全く同じ人は、この世には一人もいません。一人一人違うのが当たり前で、互いに認め合うことが大切です。まずは、相手の内面を知ろうと努力してみてください。そして想像してください。きっとその人は皆さんと同じ感情を持っていることがわかります。自分と「違う」イコール「普通じゃない」と決めつけなければ、今までとは違う見え方になるはずです。見方が変われば、感じ方も変わります。

優秀賞　北海道PTA連合会会長賞

「いじめと僕の夢」

岩見沢市立清園中学校２年
谷内　楓

「どうして、僕ばかりこんな思いをしなければならないんだ！」

そう思ってはいても、声に出すことができなかった。心の声は、彼らの元には届かない。

だから今日も、いつものように叩かれた。これは、間違いなくいじめだ。同級生達によるいじめは、小三の夏休み明けからずっと続いていた。どうして僕だけがいじめられるようになったのか。その理由が彼らの口から聞けたのは小五の終わり頃。それまでの約二年半、僕は、自分だけが差別されていることや、暴力を振るわれていることにずっと悩んできた。

いじめの理由。それは僕がハーフで、他の人と違ったからだ。ただそれだけの理由だった。僕は怒りと悔しさで胸がいっぱいになった。そんなくだらない理由でいじめられるなんて納得できない。理不尽すぎる。自分の生まれを変えることなんて誰にもできないのに。自分はおろか、自分の大切な家族までもが否定された気持ちになった。悔しくて悔しくてたまらなかった。いじめっ子たちに対する怒りももちろんあったが、彼らと向き合わず、いつか誰かがなんとかしてくれるだろうと、他人に解決を任せ、自分からは何もしようとしなかったのが情けなかった。

僕をいじめから救い出してくれたのは五・六年の頃の担任の先生だった。長嶋先生がクラスに掲げた二つのきまり。それは、「人を傷つける言葉や行動は絶対に許さない」ことと、「頑張っている人や頑張っていることを認め合う」ことだった。今、思えばすごく当たり前のことだが、恥ずかしいことに中二になった今でも守れていないときがある。長嶋先生は、このきまりを守らない人がいると、長い時間をかけてしっかりと話をしてくれた。このことが集団生活を行う上で大事なんだという先生の思いが伝わった。この、きまりのおかけで、僕はひどい「いじめ」から解放された。しかし、目に見える暴力はなくなったものの、ちょっとした意地悪や差別は続いていた。先生は、そのことに対しても全力で向き合い、関係者同士でしっかり話し合い、解決へと導いてくれた。

僕は、何事に対しても正面からぶつかり、全力を尽くす長嶋先生の姿を見て、深い感謝と深い尊敬で胸がいっぱいになった。このときから、僕の夢は「教師」になることになった。きっかけを作ってくれた長嶋先生はもちろん、そのときまでなんとなく見ていた先生方に対する視線は、熱いものへと変わっていった。子どもたちとどのように向き合い、どのような言葉をかけているのか。視野を広く持つと、先生方は一人ひとりに違う声かけや接し方をしているということがわかった。もちろん先生方にも個性があるので、使う言葉や雰囲気も違う。しかし、どの先生からも感じられるのは、子どもに対する「愛情」だった。いけないことをした人には、「怒る」のではなく、なぜダメなのかということを諭すための「叱る」だった。僕は、いじめられたことをきっかけとして、このようなことまで考えられるようになった。「いじめのおかげで」というふうにいうと誤解されてしまうかもしれないが、自分の視野が大きく広がったのは紛れもない事実だった。

いじめを通じて見つかった僕の夢。教師。「どんな先生になりたいですか」、そう聞かれたら、僕は迷わず答えることができる。長嶋先生。僕の「恩師」であると同時に、「理想」だから。僕は先生のような人になりたい。そのためには、まず、人から信頼されるような人になること。信頼は、毎日の誠実な行いによって作られる。勉強や生徒会、部活動はもちろん、掃除などの当番活動においても手を抜かず誠実に取り組み、努力を惜しまず夢に向かって走り続けたい。あの日の僕のようにいじめに苦しむ子どもの光となれるように。

優 秀 賞　公益財団法人北海道青少年育成協会会長賞

過去を乗り越えて

北斗市立茂辺地中学校２年
房田　心玖

私は、現在茂辺地中学校に通っています。茂辺地中は少人数ながらも英語活動が盛んな学校で毎日楽しく過ごしています。小さいけれど生徒会の副会長を務めています。

でも私は、本来通うはずの中学校ではなく、特認校制度というものを利用し、校区外通学をしています。私が校区外通学を決めた最初のきっかけは、小学校の頃の不登校でした。不登校という言葉の響きは、今も私の中で様々な感情を呼び起こします。

ですが今回、自分自身の気持ちと向き合いたいと考えました。この場をかりて、２年間の私の気持ちの変化についてお話したいと思います。

学校に通えなくなったのは、小学校５年生のときに、突然陰口を言われたのがきっかけでした。クラスで一番仲の良かった子が私のことを陰でいろいろ言っていると。最初は嘘だと思い、信じていませんでした。けれど、徐々に私への態度、行動、話し方に違和感を覚えていき、実際に聞いてしまいました。なんでそんな風に悪く言うんだろう、仲良くしていたのに、私が何かしたの？

それからは上手く友達とつきあえなくなり、人に自分がどう思われているのか気になって、不安ばかり感じるようになりました。

不登校中の自分は、このままで中学校に行けるのか、自分はこの先大丈夫なのかと、不安ばかり募っていました。今思うと、私は学校に行くことで、人に会うことで、人の目が気になってしまったのだと思います。

人の目を気にして、学校へ通えない自分は入学してもまた通えなくなると思いました。けれど、誰かと関わりたい、という思いは強く、全く新しい環境でもう一度、学校生活をやり直そうと決心したのです。

両親が、市内の学校を沢山調べてくれたり、私の心の状態や気をつける所を話してくれたりしました。いくつかある中で私の胸に響いたのが、少人数の茂辺地中学校でした。

自分が転校という選択ができたのは、両親のおかげでもあります。ですが、自分自身でも決断できたのは、新しい環境に行けば自分を変えられると思いました。全てやり直し、次こそは一人一人とのコミュニケーションを大切にしたいと思いました。

中学校の一年を振り返ると、やはり壁にぶつかることや、クラスメイトとのすれちがいも多くありました。そのときは、学校に行きたくないと過去の自分が顔を出すことがあります。ですが、お互いに話すことで、気まずいままじゃ周りに良くない雰囲気になるとわかりました。同時に元の関係に戻りたい、もう一度仲良くしたい、そう思える友達なんだなと強く思えました。そして、待っているだけじゃ変わらないので、自分から良い形にしていきたいと思い、いろいろあっても仲間と楽しく過ごしています。

それでも自分はまだ「信用」というものが怖いです。どれだけ時間が過ぎても、トラウマは改善されていません。誰に対しても［裏切り］を考えてしまう自分自身を「怖い」と思います。

もちろん変われたこともあります。人の顔を見て話せるようにもなり、コミュニケーションを楽しめるようになれました。人とのすれちがいに傷ついても、もう一度その人と向き合おうと、前を向けるようになれたことが自分なりの成長だと感じています。

人を信じることが怖くなった自分が、最後まで信じることが出来たのは、父と母でした。支えてくれた両親がいてくれたからこそ、私は不登校を乗り越え、今の学校生活を送れているのだと改めて思いました。

経験したトラウマの中にずっといても、自分の世界は閉じられたままでした。それでも世界を変えようと思えたのは、両親の存在が大きいです。最後に過去の自分から抜け出せるきっかけをくれたクラスメイト、お父さん、お母さん、本当にありがとう。

奨励賞

夢をかなえる

江別市立野幌中学校３年
五十嵐　彩佳

私がテレビを見ていた時、ふと「ロボットの近未来化」のニュースが目に留まった。今日、私たちの生活を振り返ると、ロボットだけではなく、たくさんの電子機器が使われている。これからの未来は、ロボットや電子機器が中心の世界になっていくのだろうか。そんな疑問がわいた。

そんな時私は、看護師の母と介護士の叔母に話を聞く機会を得た。母が勤務している病院では、まだロボットは導入されてはいないが、電子カルテを中心に電子機器が多く使われているそうだ。

母は、電子カルテに触れる時間が多くなり、患者さんに直接触れる時間が減っているということに疑問を抱き、そこに、何か足りないものを感じているという。

そして私は、叔母が勤務している「らしく」という介護施設を訪問した。そこでは、あまり電子機器は使われておらず、入居者さんに寄り添う形で介護が行われていた。とにかくよく入居者さんの話を聞いている。入居者さんのペースに合わせて、うなずき、共感しながら、入居者さんがくつろいだ時間を過ごせるように配慮していた。食事の場面では、入居者さんの不自由な部分を補うことができるような食具を用いて自分で食べることを側で見守っていた。そして、できない部分にのみそっと手を差しのべていた。介護士さんと、入居者さんが支援する人とされる人という関係を超えて、生活を共にする家族のように過ごしていた。障害を持って生活している方たちが、本来の自分らしく生活できるように支援していた。そこには、「あたたかさ」が感じられた。つらい時、苦しい時に寄り添う心があった。

どんどん電子機器が発達し、ロボットが実用化されていく。皆さんも一度は考えたことがあるのではないだろうか。ロボットという存在により、人間がいらなくなるのではないか、ロボットばかりが活躍する時代になっていくのではないかと。私は、もしそうなってしまったのならば、この世界は冷たい氷のように閉ざされていってしまうのではないかと不安に思った。しかし、一方で、現在の時代では電子機器やロボットは私たちの生活に欠かすことのできないものであることも事実である。人間には到底行えないメモリー機能を持ち合わせ、プログラムされた通り、的確に作業をこなすことができる。さらに、会話ができるロボットや人間のような動きができるロボットも創られている。このようなロボットたちを創り出していくのは、人間であり、それこそ人間にしかできないことなのだ。私は、介護施設で入居者さんたちに寄り添う介護士さんたちの姿を見て、人と人とのつながりの大切さに改めて気づかせてもらった。また、介護士さんたちは、入居者さんたちの側に寄り添い、目を合わせ、時には優しく触れて共に語り合い、共に笑い合っていた。そしてその方一人一人のもっている力を活かしていた。このような「あたたかさ」をもって、人に関わるということは、私たち人間にはとても重要なことなのだということを教わった。

人間は、人を癒やし、その人との関わりによって、心を豊かにするという力を持っている。

私は、人の心と手のあたたかさをしっかりと持ってこれからの未来を創り出していきたい。

その心を持っていれば、どんな未来も可能にできると思う。

「夢をかなえるのは私たちだ」

奨励賞

「アウトドア、そして家族」

札幌市立宮の森中学校３年
岸本　慶介

皆さんはアウトドアは好きですか。アウトドアといってもキャンプや登山など様々です。その中でも僕はよく釣りに出かけます。多いときには週一でほとんど釣りに行く、ということもあります。

僕がアウトドアを好きになったのは父の影響です。父は僕が小さな頃からいつも様々な所へ行かせてくれました。四国の山奥の川、東京の近くにある自然が広がる海、車で六～七時間もかかる北海道の羅臼。別に父は暇な訳ではありません。いつも夜の十一時より遅く帰ってくるのはあたりまえという人です。そしてアウトドアに行くのはいつも決まって金曜日の夜遅くや、日曜日の早朝から。なぜ疲れているはずなのにそこまで僕たちをキャンプなどに連れて行ってくれるのかいつも不思議に思っていました。

そんなある日。たしかあの日は東京から二～三時間のところにある海辺にアオリイカを釣りに行っていた時のことです。その頃僕は神奈川から北海道に引っ越しすることになって不安と希望の織り混ざった不思議な気持ちになっていたことを覚えています。こっちの友達とはもう会えないのか、あっちでは友達ができるのかと焚き火の前で悶々としていると父が話しかけてきました。「あっちでもお母さんたちの力にちゃんとなってやれよ。」と、僕は「わかってるよ。」としか答えませんでした。その後何を話したかは覚えていません。しかしその一言だけが今も深く心に残っています。内容としては取るに足らない話です。しかしその一言によって僕はそのとき、父と心を合わせられた気がしました。昔会ったアウトドアの本なんかを書いている方が言っていました。「人間なんて単純だ。悩んだ時はただ焚き火を囲んで話せばいい。そうすれば本音で語り合える。」と、その話を聞いた当時僕は「人間そんな単純なもんじゃないだろ。」とどこか覚めた目でいました。しかし今なら断言できます。本当にその通りです。人はいつも何かしらの悩みをかかえています。しかし焚き火の前では、あのパチパチという木の弾ける音、メラメラと燃える心地良いあたたかさの前では、少し心をオープンにできるのです。

時は過ぎてゆき現在、北海道に移り、こうして楽しく生活しています。しかし一つ身の周りで変化したことがあります。それは父が単身赴任したことです。このことはこっちに来るときにはすでに決まっており、それが一年後か三年後かというだけでした。父が単身赴任する一週間前、僕たちは支笏湖にカヌーをしに行っていました。その時も以前と同じ様に「なかなか帰れないからしっかりとお母さん支えてあげろよ。」とだけ言われました。いよいよ父が出るとき僕は「じゃあね。」とだけ言いました。

家族とはかけがえのないものです。別れるときはつらいかもしれません。しかし家族のキズナは絶対にあり続けます。そんなことに気付ける機会を与えてくれた父と、アウトドアには感謝しなくてはなりませんね。またアウトドアが与えてくれるものはこれだけではありません。自主性、工夫、調理、工作などとうてい千六百字ではおさまりません。父もそこが好きなのだと思います。

皆さん、アウトドアやりませんか。

奨励賞

強い意志をもって

江差町立江差中学校３年
佐藤　志保里

私は小学生の時から陸上競技をやっています。真面目にこつこつやっていればトップアスリートになれると思ってやってきました。そして、全国大会に出場できるようになり、競技場でトップ選手と会うなかで、自分の中の「トップアスリート像」のようなものができていました。全国大会で優勝する先輩達はみんな、存在感があり、コミュニケーション力が優れていて、話も面白い人ばかりでした。名前からして、かっこいいドラマの主人公のような名前です。私は、「こういう人がトップアスリートになる人なんだ。」と思うようになりました。

一方、自分はというと、「面白い」とは真逆の「真面目」。口下手で面白い話もできない。トップアスリートになるような人とは全然違う。名前だってよくある「佐藤」だし…などと思い、自分はトップアスリートにはなれないんだと考えて、悩んでいました。

そんな時、テレビで松井秀喜さんが出ている番組を見ました。それは、松井さんがメジャーリーグで活躍する前の、ジャイアンツにいたときの話です。チームの祝勝会でハワイに行った時に、チームメイトがお酒を飲みに街へ出かけるなか、松井さんは一人ホテルの部屋で、スクワットや筋トレをしていたそうです。

それを見て私は、「「真面目」でもいいんだ。松井さんのように真面目に練習していけば、トップアスリートになれるんだ」と目が覚めたような気がしました。

同時に、優勝して日本一になったのだから、一日くらい遊びに行きそうなものなのに、なぜ松井さんはそんなに真面目に向かっていけるのだろうか、と考えました。

きっと松井さんには、優勝よりもさらに上の目標や夢があったのではないだろうか。だから、毎日行っているトレーニングを、場所が変わっても一日も欠かさず続けていたのだろう。はっきりとした自分の目標があって、その目標を達成するという強い意志があるからできるのだと思いました。

他のスポーツ選手のインタビューでも、どの選手も、はっきりとした数字・記録、「この大会で優勝したい」など、明確な目標を迷いなく答えていました。はっきりした目標をもつことがどんなに大事か、強く感じました。

振り返ってみると私は、トップアスリートの表面的なイメージだけで、自分は違う、自分はなれないと思ってしまい、目標もあいまいではっきり口にすることができませんでした。心が弱かったのです。私に一番足りないもの、それは、はっきりした目標をもつことと、その目標に向かっていく「強い意志」。そんな簡単なことに、やっと私は気づいたのです。

あのとき松井さんがもっていた目標は、当然ですがまだ達成されてないし、きつい練習を積んでも手が届く保証はありません。それでも、達成するまで全力で目標に向かっていった、その精神の強さがトップアスリートの力なのだと思います。私も、今までの自分を変えたいと、強く思いました。

今私は、自分の目標をはっきり言葉にするよう意識しています。今年の春、脚の故障から不調が続き心が折れそうになったときも、「自己ベスト更新！」という目標があったから、やめずに続けてこられました。今の私の大きな目標は、アジアユース大会に出場することです。長い道のりですが、あきらめず、そこにつながる一つ一つの目標に「強い意志」を持って、真面目に全力で向かっていきたいと思います。

奨励賞

なりたい自分になるために

礼文町立香深中学校３年
鈴木　佑

「もしも、明日地球がなくなるとしたら最後に何を食べたい。」

みなさんも一度はこのような話をしたことがあるのではないだろうか。僕も絶対にこんなことは起こらないと頭の中で確信しながら冗談のように話していた。しかし、あの日、北朝鮮によるミサイルのサイレンでとび起きた朝、初めて死ぬことへの恐怖を感じた。そして、その後続いた大型の自然災害や異常気象などから、実際にいつ何が起きてもおかしくない現状だと実感した。

そんな中で僕は困難に直面した時どんな自分でありたいかを考えてみた。そんな時こそ優しい人でありたい、自分の身を守るだけではなく周りの人を助けることのできる人間でありたいと強く思った。

しかし、昨年の冬休み自分の情けなさを痛感させられるできごとがあった。それは、家族とデパートのレストランへ食事にいったときのことだ。

僕はトイレに行くために、デパートのフロアに出た。そして、その帰り道に、１人のつえをついている女性が下りのエスカレーターに近づいていくのが目に入った。コンコンと床をたたきながらエスカレーターを確かめたその時、もともと閉じていた目をさらにギュッとかたく閉じ、不安な表情をしたのだ。僕は手伝ってあげなくちゃと思い足を止めた。しかし、体は立ち止まったままで頭の中だけがグルグルと回った。

「かたくなに断られたらどうしよう、上手に補助できるだろうか。」

自分でもあきれるほどマイナスの想像が頭の中をかけめぐった。はっ、と我に返ったときには、その女性は他の方向へ歩いていってしまった。そして、僕は考えることをやめて家族のもとへと向かったのだ。

このことは、数日、僕の心をとらえ嫌な気持ちにさせた。困っている人を思いやる気持ちより、自分のことばかり考えて体が動かなくなってしまった。なりたい自分とは、ほど遠い行動をしてしまった。

「何が助ける人になりたいだ。」

と自分が情けなく感じて、心から悔やんだ。

そんな時、父が『君たちはどう生きるか』という本を買ってきた。内容は、１人の少年が悩みながら成長していく話だった。その本を読み終えた時、胸につかえていた何かが、スー、と落ちていく感じがした。この本の中に心に響いた文章がある。それは、

「過ちをつらく感じるということの中に、人間の立派さがある。正しい道に従って歩いていく力があるから、苦しむんだ。」

という文章だ。この文章から、僕も正しい道に向かっているんだ、弱い自分を見つけられたことは感謝すべきことなんだと気づいた。もしも、女性に声をかけられなかったことをすぐに忘れて嫌な気持ちを抱かなかったとしたら、この本を読んでも心に響くことはなかったと思う。弱く情けない自分を見つけることもなかったのだ。あやまちをくり返さないために人は悩むんだ、そして、自分自身の力で良い方向へ変えていけると身をもって学んだ。

このできごとによって、僕はなりたい自分に一歩近づくことができた。一歩とは何か。それは、迷いがなくなったということだ。声をかけるかかけないかで悩む過程を僕は通りすぎた。困っている人がいれば、結果を恐れず、相手を思いやる気持ちを第一に行動に移そうと思っているからだ。

皆さんも、これから自分のやるべきことができずに悩んだり後悔することがあるかもしれない。しかし、そんな時は、自分と向き合い弱さを受け入れ、何度でも何度でも悩もう。悩めることに感謝して。なりたい自分になるために。

奨励賞

小さな一歩

新冠町立新冠中学校３年
矢野　なずな

二〇一八年一一月、認知症の夫を殺害したとして、同居の妻が殺人容疑で逮捕される事件が起きました。殺害の動機は
「夫の介護が辛かった。」
ということ。殺害現場には紐が残されていたということから、妻は夫を殺害後に自らの命を絶とうとしていたのではないかと考えられています。

自分が長く連れ添った大切な人の命までも奪いたいと言う気持ちにまで追い込む老老介護の現実。このニュースで初めて、老老介護と言う言葉を知りました。

「老老介護」とは介護する側、される側がともに六五歳以上である介護世帯を指す言葉で、全介護世帯の五四.七パーセント、約六割を占めるまでになりました。

実際、私の身近では、祖母が曾祖父を介護していました。曾祖父は足が不自由でしたが、四六時中、そばにいて、介護をする必要はありませんでした。それでも、排泄や入浴の手伝い、食事や薬の準備、また、体調をくずしたときの看病など、多くの苦労があったように感じました。結局、曾祖父はその後入院し、再び祖母の介護を受けることはありませんでした。しかし、もし、あのまま介護が続いていたら、祖母も介護の苦しみを感じ、同様の事件を起こしていた可能性も否定できません。

このように介護に関する問題は、自分の身近でいつ起きてもおかしくない問題なのです。
このような状況を生み出す要因は、核家族化が進み、子どもや孫へ介護を頼めなくなってしまったこと、近所付き合いが希薄になり、他人に助けを求めることへの抵抗感が感じられる社会となってしまったこと。また、金銭的な問題や施設の不足で施設に入所できないことなど、その理由は様々です。

このような状況は、私たちが大人になる二十年後、三十年後には、今以上に大きな問題となっていることでしょう。

では、私たち中学生が今できることはどんなことでしょうか。介護施設を多くしたり、介護用ロボットを開発したりと考えられることはたくさんありますが、今私たちがすぐにこのようなことに取り組むことは難しいことです。

しかし、核家族化の問題、また、地域的な孤立を防ぐことは私たちの手でもできることです。

例えば、祖父母がいる人たちは、関わりを増やすこと。電話をするだけでもいいと思います。私は、部活の試合や学校行事のビデオを祖父母の家に送り、電話でその内容を話すことも通じて、定期的に関わりをもっています。

また、学校では、行事に地域のお年寄りを招待し、楽しんでもらうことが考えられるでしょう。行事で顔を合わせることを通じて、私たちと関わることはもちろん、私たちの親など多くの人との関わりができていくはずです。そのようなことを通して、お年寄りと親しくなれば、いざとなった時助けを求めやすくなるでしょう。毎日声掛けもしていれば、少しの変化にも気づけるはずです。介護に疲れた顔をしていたら、近所の人でサポートすることもできるのではないでしょうか。

どれも小さなことだとは思いますが、小さなことだから、簡単にできるはずです。そして、そうした小さな一歩を、多くの人が踏み出すことで、少しでも「老老介護」の問題が改善されていくのではないかと思います。

老老介護を含め、今社会には考えなければならない問題がたくさんあります。私たち中学生はそうした問題をまずは知ること。そして、自分ができる小さな一歩を考えることが大切だと思います。そうした一歩を多くの人が踏み出すことで、社会はより良い方向へ進んでいくはずです。

今、あなたが踏み出せる一歩はどんな一歩ですか？

奨励賞

さびしさを大切に。

根室市立柏陵中学校３年
土岐　羅求

四億年前、陸に上がろうとした一匹の魚がいました。皆と一緒に普通に泳いでいれば良いのに、なんと変わった魚だろう。でもその変わり者の魚の先に、今の私達がいるのです。

皆さんは一人でいることが怖いですか？思春期まっただ中のこの時期、友達や仲間は大事です。でも、まわりを見て、人と違わないようにしていませんか。変わっていると後ろ指をさされたくない。なぜなら一人は淋しいからです。

私も一人でいる人の気持ちを味わったことがあります。一番きついのは、やっぱり他人の視線。「アイツ一人だな」と思われるのが恥ずかしいような、痛いような、たまらなく苦痛という感じです。それに、ダイレクトに「数人でグループを作って下さい。」って言われた時に困る。だから、どこかしらの大勢いるグループに潜りこもうと思い立ったことがあるのです。結果、見事に浮きました。話題についていけなくなり、あいづちを打つだけになる。顔は笑っていたけれど、むしろ前より淋しかった気がします。その時私は、ふとこう思いました。一人って、そんなに悪いことだったのだろうか…。

一人でいる時って本当に不思議な感覚です。自分のことは自分でなんとかするしかない。でもそれは、自分を見つめなおすこと。そう、自分を知るという点では、一人でいるときの深まりは結構大切なのです。

その一方で、私達は人とつながらずに生きるのは不可能です。

たとえば、私は、一人では何も作れません。今日の服やすわっていたイスだってつくれません。服の布や、イスのフレーム。誰がどうやってつくっているのでしょう。どうやって運ばれてきたのでしょう。いったい、何千何万という人が関わってきたのか、私には見当もつきません。そうして初めて、私は今、ここで弁論をすることができるのです。

人とのつながりを大切にしつつ、自分も大切にするにはどうしたら良いのでしょう。そのヒントは一人でいる時の感覚にあります。人と関わるときにはまず、自分自身が見えていないといけません。一人でいる淋しさに支配されて、自分をつくろい続ければ、自分を見失ってしまい、流されてゆく。それがあの、謎の淋しさの正体だったのでしょう。無理をしてまで人と一緒にいたいと思うのは、自分の考えが見えない不安によるものだと思います。

学び合い、協力し合える仲間や友達に会うには、自分をつくろってはいけない。本来の自分を出したとしても理解してもらえないなら、少し淋しさを味わうことになるでしょう。その中でも、いつか道が開けると信じて、本来の自分を殺さないでいただきたい。

ただ、今の私達には、「違っているもの」「変わっているもの」を受け入れる余裕があるでしょうか。公共性や協調性。それらが変な形にねじ曲げられ、異質なものは、様々な形でバッシングを受ける。みんながみんなを監視し合っている。そんな世の中の空気がたしかにあるように思います。

そんな世界だからこそ、私達は自分であり続けるとともに、互いの考えを聞き合い、模索していかなくてはいけません。自分を知った後は相手を、そして、世界を。どれも百パーセントはわからないのです。ただ、知ろうとする姿勢は、私達の世界を広げてゆきます。

むれを離れ、一人で陸に上った魚は、そこで何を見たのでしょうか。きっと、川の中よりも、広い世界を見たはずです。

奨励賞

思いやりの先に

美幌町立北中学校３年
山森　隼人

皆さんは「リスペクトアザース」という言葉を知っているだろうか。リスペクトとは、「尊敬する、敬意を払う、」アザースとは、他の人、つまり自分以外の人を尊重し、敬意を払う、ということである。ちょっと意識するだけで、何かが変わる、と僕は思っている。

皆さんは、周りの人たちに対して否定的な感情を抱いてしまったことはないだろうか。例えば、テストで好成績を残したり、大会で良い結果を出した人に対して、

「ウザ。調子乗んな。」

などという言葉を返してしまったことはないだろうか。僕も体験したことがあるからわかるのだが、頑張ってきたのに心ない言葉をかけられ、けなされた時は、悲しく、切ない思いになる。

昔、悪口を言われて苦しんでいる友達がいた。なぜ悪口を言われてしまうのか。答えは簡単だ。嫉妬だった。その友達は色々な面で活躍し、本人に全く悪いところはなかった。「羨ましい」がエスカレートして、「嫉妬」という感情を持たれてしまったのだ。僕は悪口が大嫌いだ。良くない感情を抱いてしまうのは仕方ない。でも、その感情を言葉に発してしまうと悪口になる。今まで悪口を言ってしまったことがある人は、それがどのような感情だったか考えてみてほしい。考えてみると、その人は悪くなかったかもしれないから。

人を否定するのではなく、その人の良いところ、尊敬できる点を見ようとすること、目に見えることばかりでなく、結果までの過程やその姿勢も心の目でしっかり見ることが大切ではないかと思う。

日本にも「リスペクトアザース」に似た言葉がある。「我以外皆我が師。」自分以外の人は皆、自分に何かを教えてくれる先生、という意味だ。この謙虚な気持ちは、日本人が持つ素晴らしさだと感じる。相手へ向ける目だけでなく、自分自身の内面を見つめることも忘れずに生活する、という意味が含まれているように感じる。この二つの思いがあれば、誰もが温かい思いと言葉があふれるのではないだろうか。

「じゃあ、産まなければ良かったじゃん。」実は僕も、一番尊敬する母親に、こんな言葉を言ってしまったことがある。それは、些細なけんかの中で発してしまった一言だった。感情に任せ、相手のことなど考えもせず、一番大切な人を傷つけてしまっていたのだ。僕のその一言を聞いてから数日間、いつも笑顔のお母さんの顔が曇っていると感じた。仕事も家事もすべて一人でやり、疲れているはずなのに、顔に出さず、笑顔を向けてくれる母。その母への尊敬の思いと、放ってしまった一言。そう、僕には、あの二つの思いが欠けていたのだ。自分以外の人を見つめ、尊重する「リスペクトアザース」と、自分自身を見つめ、正し、おごることなく相手を受け入れる「我以外皆我が師。」そしてそういう気持ちを持つだけでなく、相手に伝えることが大切なのだ、と僕に教えてくれたできごとだった。

人と人との間に流れる、目に見えない空気。さわやかにするそよ風のような言葉と、一瞬で空気を凍らせる黒い毒を放つ言葉。感情に任せて放つことなく、いつも相手を思いやることができればと思う。相手によって接し方を変え、間違った鎧で自分を守ってはいけない。

誰もが尊い存在であることに変わりはない。僕は、出会えた二つの言葉に込められた「思いを遣う」ということを、大切にしていきたい。皆さんも日々の生活にこの言葉を。「リスペクトアザース」そして、「我以外皆我が師。」

奨励賞

あいさつの力

白糠町立庶路学園９年（小中一貫校）
関根　璃音

あいさつはなぜしますか。「習慣？」「近所づきあい？」「しろと言われるから？」理由は様々かもしれません。

私が学んだ小学校には「元気よくあいさつをする」という伝統があり、地域でも評判でした。元気なあいさつは、当たり前のものでした。

私の学校は昨年、義務教育学校になりました。一年生から九年生が一緒に生活するようになると、学年が上がるにつれ、元気なあいさつが少なくなることに気がつきました。卒業後も、年を重ねていくほど、自発的なあいさつとは、無縁になってしまうのでしょうか。

私は、伝統を守りたいという使命感から、あいさつを続けています。

登校中のある朝、向かいからウォーキング中のおじさんがやってきました。私は、いつも通りあいさつをしました。しかし、あいさつは返ってきませんでした。次の日もその人に会ったので、昨日は聞こえなかったのではないかと、今度は大きな声であいさつをしてみました。「おはようございます！」すると、こちらを見たものの、やはり、返ってはきませんでした。そのまま、このような状態が数日続き、心の中には、モヤモヤしたものがたまっていきました。大きな声でもだめ。聞こえないから返さなかったわけではなさそうです。では、どこに原因があったというのでしょう。悩んだまま、私は家族と買い物に行き、ドライブスルーで昼食を買うことになりました。お昼時でお店は混雑していて、店員さんは皆とても忙しそうに見えました。商品を受けとり車が出ようとした、その時、

「ありがとうございました。またお越しください。」若い店員さんが、高く澄みきった、よく通る声と、さわやかな笑顔で私たちを送り出してくれました。その笑顔に圧倒され、気がつけば、自然とこちらまで笑顔になっていました。「これだ！」いくら大きな声であいさつをされても、気持ちがこもっていなければ、きっと返しにくいでしょう。

早速、私は気持ちを込めて大きな声、そして笑顔で、おじさんにあいさつをすることにしました。状況はなかなか変わりませんでしたが、根気強く、あいさつを続けるうちに、会釈をしてくれるようになりました。そしてついに「おはよう」と返してもらえたのです！大きな達成感と、あいさつを返してもらえた時の喜びは、今も強く心に残っています。

私はこれまでも、すれ違う人にあいさつをしていましたが、いつしか私のあいさつは、雑になっていたのだと思います。人と交わす言葉には、心がかよっていることを忘れてはいけないのです。実は私は、自分から人に話しかけるのが苦手なのですが、朝、教室までの道のり。友達の目を見て明るくあいさつを交わすようになると、自然と会話が続くようになりました。今では自分から話しかけることが増え、友達から声をかけられることも多くなりました。

北海道胆振東部地震では、ライフラインだけでなく、災害に強いはずの情報ネットワークにまで障害が起きました。通信手段は制限され、多くの人が困惑したのには、情報端末による間接的な関わりの中で、顔を合わせて言葉を交わす機会の少なさが影響していると考えます。私たちは、普段から周りの人たちと声をかけあっていくべきです。そうすることで、普段はもちろんのこと、いざというときにも、話し合ったり、助け合えたりできると思います。

実際に行動を起こすとなると、ためらうこともあるでしょう。そんなときこそ、誰もが簡単にできる「あいさつ」が役立ちます。

一人であいさつはできません。あいさつは、そこに自分とは異なる人がいるからするのです。「おはようございます」「ありがとうございます」には、あなたを大切にしていることを表す意味もあるそうです。あいさつは、互いを思いやる関係をスタートする、第一歩。今日からまずは、身近な人への「笑顔のあいさつ」から始めてみませんか。

奨励賞

当たり前を常識に

旭川市立神居東中学校3年
岡野　心優

当たり前は変えなくてはいけない。「当たり前」「常識」という言葉を私はよく耳にします。「当たり前」とは、「普通のこと」を意味し、「常識」とは、「一般の社会人が共通にもつ普通の知識」を意味します。そして、「当たり前」には一般社会で通用する世間の常識のものや、個人の考えで生み出す、人によって違いのあるものがあります。その結果、「当たり前」は使う人によって意味が変わってしまっているのです。しかし、そのことに気付かず、思うままに「当たり前」が使われることに私は不安を抱かずにはいられません。

私の家の近くに、せせらぎ小路という遊歩道があります。車は通れない道なので、子どもからお年寄りまで、たくさんの人が利用しています。私もよく利用しますが、道端にゴミが散乱している光景を目にします。「誰がこんな心ないことを」と思うことがありますが、今の自分はそこまで。正直、勇気をもって行動に移せない、情けない自分がいます。その傍ら、近所の方が袋を持ってタバコの吸い殻などのゴミを拾っている姿を何度も見かけます。腰を屈めて拾う姿は私の目にとても痛々しく映りました。何故ポイ捨てをしていない人がこんなことをしなくてはならないのか。どうしたら改善できるのか。私はポイ捨てをする人たちに「当たり前」の考え方を見直してほしいと思っています。捨てることが当たり前なのではなく、捨てることをやめるという発想をもち、その「当たり前」を変えてほしいのです。

その一方、学校生活では、具合の悪い仲間がいたら寄り添って保健室に連れて行ったり、自ら進んで係活動などを行ったりする仲間の姿も目にします。つい私がその友達に発した「面倒ではないの」という質問にも表情一つ変えずに「当たり前だから」と答えます。私はその答えに、自分は結局ポイ捨てをする側の人と同じ考えだったのではとドキッとさせられ、恥ずかしくなりました。そして、私の友達の「当たり前」は、常識なのではと思いはじめました。

さらに私は、「何故こんなにも『当たり前』は人によって違うのか」を考えた時に、それは、物事の価値観やその人の周りの環境によって左右されているのではないかと思うようになりました。例えば、自分の親がポイ捨てしているのを幼い頃からまのあたりにして、「それでも許されるんだ」と考えるようになると、「ポイ捨てなんてどうってことない」という判断になるのではないでしょうか。その行為自体が良くないことだという感覚を身につけることができないと思います。また、学校生活の例で考えると、困っている人に手を差し伸べるという「いいこと」が最初は真似だったかもしれませんが、頻繁に行われることによって、「良いこと」＝「当たり前」になっていったのだと思いました。

これから進化していく社会の中でも、「当たり前」という言葉は、良くも悪くも使われていくでしょう。そのような中、私たちを取り巻く環境の全てを変えることは難しいことです。しかし、今のうちに自分の「当たり前」について常識に照らし合わせたり、周りの人の言動を見たりして正しく理解し、自分にできることを行うことが必要だと感じました。そして、私たちが大人になった時に、自分たちの子に「良い当たり前、つまり常識を伝えていくことが大切である」と。「おや？」と思った時こそ、自分の「当たり前」を変えるチャンスなのです。

日常の中にある「当たり前」に疑問をもち、良い「当たり前」が増え、常識になるように、私はこれからの生活を過ごしていきます。

当たり前は変えなくてはいけない。

奨励賞

なりたい自分になるために

苫前町立古丹別中学校２年
斉藤　夏華

私は変わりたい。その思いをもったまま、「変われない自分のまま」、過ごしてきました。

私は自分があまり好きではありません。むしろコンプレックスだらけ。どれだけ勉強を頑張ってもテストの点数は良くないし、運動だって苦手。なにより人に自分を見せるのが嫌で、話すなんてもっての他。だから誰にでも笑顔で話せて、何でもできる人はキラキラして見えて、とてもうらやましい。

そんな輝いている人と私はどこが違うのだろう。どうやったら私も輝けるのだろうと考えてみました。

私には一つ年下の弟がいます。弟の蓮は私とは正反対です。小さな頃から人なつっこく誰とでもすぐ仲良くなれる。よく喋るし、よく笑う。自分の意見もはっきり言える。私はたくさん勉強をしてもいい点数が取れないのに弟は何もしなくてもいい点数。運動だってできて、周りの人に「なんで兄弟なのに蓮だけ運動ができて夏華はできないの」と言われたことだってある。それもあって私は少しずつ弟のことがうっとうしく感じるようになりました。

「どうせ蓮は元々頭いいし運動もできるから努力しなくていいよね」
と思うようになったのです。

私は中学校にはいってから、未経験のバレー部に入部しました。父にサーブの練習につきあってもらった時には、言われた通りやってもうまくできず、

「恥ずかしさや失敗を恐れているうちは何もできないぞ。もっと本気を出して、身振り乱してやってみれ！」と怒鳴られました。私は悔しくて涙が出ました。こんなに一生懸命やっているのに、「なんでそんなこと言われなきゃいけないの！」

家で

「なんで泣いてるの」と聞いてくる弟に

「うるせぇ！おまえにはわからねーよ！」

と叫びました。

その少し後、母は私にこう言いました。

「蓮だって父ちゃんの言うように『本気で身振りみだして』頑張っているんだよ。最初から何でもできる人なんていないんだよ」と。

昨年の四月、私たち家族はこの町に引っ越してきました。弟は小学五年生ではじめて野球を始めました。思えば、グローブすら触ったことが無い弟は毎日泥だらけになって練習していました。練習が終わって夜八時を過ぎても、ご飯も食べず、ずっと外で父に相手をしてもらって練習をしていました。私が部屋で窓を開けていると父の声が聞こえてきます。「もう暗くてボールが見えないから今日は練習をやめよう」

すると弟は「まだやる。」

そう言った後、涙声でこう続けました。

「おれは１日でも早くみんなと同じようになりたい。だから一分でも長く練習したい。できないのが悔しくてしょうがないよ。」と。

当時の私は「バカだな。何で辛い思いしてがんばらなきゃいけないの。やめればいいのに」と思っていました。でも、今になって私は気づいたのです。これが「本気で頑張る」ということだと。私は失敗したり、かっこわるい自分を見せたりするのが怖かったのだと思います。でもそれではいつまでたっても変われない。何にでも、一生懸命、全身全霊で頑張れば、今の自分を打ち砕けるかもしれない。

私は今、やらなきゃ、ではなく「できないと悔しいから」たくさんバレーの練習をしています。上達すると嬉しくて、楽しくバレーをできるようになりました。頑張っていることが自信につながって、少しだけ自分を好きになり、それもとても嬉しく思います。なりたい自分に近付けるよう、バレーだけでなく色々なことにもっと努力し、もっともっと、自分を好きになっていきたいです。

奨励賞

十年後の私へ

喜茂別町立喜茂別中学校３年
堀　来羽

「十年後の私へ。二十五歳となったあなたは今、どこで何をしているのでしょうか。」

みなさんは、夢はもつべきだと思いますか。私は、夢はもたなくても良いと思います。

中学校生活はあっという間で、気が付けば三年生になっていました。私もついに受験生です。先生方も親も、口を開けば受験、受験と言うようになります。しかし私は進学する高校を決めかねていました。私の行きたい高校は、美術部のある、管外の高校。それ位でした。

そんな私の将来の夢は？小学生の頃は「パティシエになりたい！画家になりたい！」と真っ直ぐに語っていましたが、最近は…分からないのです。影響されやすい性格で、テレビや授業で知った職業に興味をもっていくうちに、自分が将来何をしたいのか分からなくなってしまうからです。

私は一体、これからどうすれば良いのだろう？夢のない今、迫り来る進路。私は焦っていました。

そんな中、私は修学旅行で東京・鎌倉へ行きました。東京はどこを見ても建物がびっしり並んでいて、そこら中を埋めつくすように人と物があふれていました。最終日、二日間泊まったホテルでの退館式での出来事です。ホテルの方の挨拶で、こんな言葉がありました。

「このホテルに泊まったことをきっかけに、ホテル業界に少しでも興味をもっていただければと思います。」

これを聞いて「そうか、ホテルも仕事なんだ。」と思いました。ホテル業界。田舎育ちの私にはなじみのない、考えたこともなかった仕事でした。けれどこの仕事がないと、私達旅行者はたいへん困ります。それから私は、東京・鎌倉で過ごした三日間を思い出していました。浅草のにぎやかな仲店や両国国技館で見た大相撲、たくさん巡った食べ物のお店、満員電車。その全ては、「仕事」なのだと気付きました。初めて目にする物はめずらしく見え、旅行で訪れるのは一度きりの特別な場所かもしれません。しかし、それらは全て誰かの仕事です。私は、この狭い東京だけでも目が回るほど沢山の仕事があるのだから、全国、世界には一体どれほどの仕事があるのだろうと思うと、胸がわくわくしてきました。

世の中には、私がまだ知らない場所、仕事が山ほどある。世界には、いや日本にも、見たことのない文化が沢山ある。そのことに気付いた途端、私はそれらに触れたい、見てみたいと強く思いました。そうやって、自分の可能性や選択肢となる「引き出し」を増やしながら、将来を決めていきたいと思いました。

このことから、私は夢はもたなくても良いと考えるようになりました。もちろん夢に向かって努力することは素晴らしいことです。でも、夢は無理やり作るものではないし、なくて焦る必要もありません。なぜなら、まだ私達は世の中を知らなすぎるからです。知らないものを知らないままにしておいて、少ない引き出しの中から将来を決めてしまうのはもったいないことだと思いませんか？だから私は、こらからめいっぱい学び、見て聞いて感じて、自分の引き出しを増やすことを大切にしたいと思います。そうすれば、その中から自然と進むべき道は見つかることでしょう。

「十年後の私へ。私からあなたへ贈り物をします。それは、様々な物や人、場所、感情がつまった引き出しです。十五歳の今はまだ数が少ないけれど、きっとあなたの元に届くころには、もっともっと増えているはずです。ぜひ、存分に活用して下さい。そしてこれからも増やしていって下さいね。それでは、お元気で。」

奨励賞

情報発信の大切さ

札幌市立星置中学校３年
野月　あすみ

私は今、とても充実した環境におかれています。それは、私の大好きな折紙の創作活動を自分が納得したやり方でできているからです。また、折紙の創作活動を通して、建築士・パティシエ・カメラマン・花屋さんなどたくさんの人との素敵な繋がりができたことも、私が置かれている環境が充実したものであると感じさせる理由の一つです。

私は小さい頃から折紙が大好きで、両親や祖母から教わった折りを試してみたり、本を見て覚えた折りで毎日紙を折っていました。そして、年齢が上がるにつれて、インターネットを利用して折紙について調べたり、折紙関連のイベントに足を運ぶようになりました。また、学校でスピーチをするときや自分の意見を口にするときには、意識的に折紙に関連づけて話をするようにしてきたおかげで、友人の間では、私といえば「折紙」と言うイメージがついていきました。

私が中学一年生の冬、私の人生の転機になるかもしれない出来事がありました。それは、ORITOと言う屋号で活動している女性との出会いです。彼女は独創的なアイディアや技法で和紙を折り、照明やアクセサリー、モビールなど様々な作品を創り出す折紙作家です。私がORITOのイベントに足を運んだとき、彼女が私に声をかけてくれました。それがきっかけで、今では個人レッスンを受けさせてもらっており、私の創作折紙についてアドバイスをもらえるようになりました。そのおかげで、ランプシェードやモビールなど私自身が考えたオリジナルの作品を完成させることもできました。

私は、現在の状況に至るまでに三つのことをしてきました。一つ目は、毎日のように折紙に触れること。二つ目は、自分で情報を集めること。三つ目は、人に情報を発信していくこと。この三つです。特に私は、三つ目の情報発信が最も大切だと考えています。

私はスピーチなどで、自分の意見を発表する機会を利用して折紙の創作活動のようすを外部に発信し、多くの人に知ってもらうように努めてきました。そして、それをきっかけに、自分ではわからなかった情報を手にすることができるようになりました。それは例えば、折紙関連のイベントや、折紙の紙についての情報といったものです。また、私の存在や作品が人に認知されることにより、その他にも様々な情報が入ってくるようになりました。そして、私はそういったことが、いろいろな意味でのチャンスを引き寄せることにもつながるのではないかと考えるようになりました。

最近、情報の交換には、SNSが盛んに使われています。もちろん、それも素晴らしい、とても便利な手段だとは思いますが、私はそれだけで良いとは思いません。やはり大切なことは、人と人が向かい合い、顔を合わせてコミュニケーションをとることではないでしょうか。

また、私は折紙に関して調べたりするために、よくインターネットを利用します。インターネットから得られる情報は、人と話して得られる情報よりはるかに多いかもしれません。しかし、人と直接コミュニケーションを取るときには、声の大きさやアクセント、イントネーション、そして表情など、言葉以外にも多くの情報が得られます。だから私は、SNSやインターネットだけではなく、人に直接話し、伝えることを大切にしています。今、この場でもそうです。人に聞いてもらい、考えてもらう。人と人がしっかりと向き合い、話しをすることで、一人一人の考えはより深まるのではないかと思います。

現代は、いろいろなチャンスを受け身の立場で待っている人が多いように思いますが、私は自分から積極的に情報を発信することで、もしかするとその後の生き方の大きな転機になるかもしれない様々なチャンスをつかむこともできると考えています。チャンスは自分が発信する情報の価値に比例します。ですから、より確かなチャンスを手に入れるためには、より価値のある情報を発信するための準備が必要となります。

私たちはまだ若く、これからもたくさんの時間があります。私は素晴らしいチャンスを手にし、自分の人生を考えるきっかけを得るためには、自分が持っている情報を積極的に外部に発信しようとするアクションこそが大切なのではないかと思います。

講　評

審査員長　北海道中学校長会幹事
（伊達市立伊達中学校長）
立花（たちばな）　和実（かずみ）

昨年度は、９月６日に発生した北海道胆振東部地震のため、９月７日に予定していた「少年の主張」全道大会は、書類選考となってしまいました。胆振管内の厚真、安平、むかわの３町には、地震から１年になる今なお仮設住宅に暮らす方たちがおり、復旧・復興はまだ道半ばという状況にあります。そのような状況下ですが、今年度、令和になって初めての「少年の主張」全道大会が開催されました。

今年度の「少年の主張」全道大会は、各地区から選ばれた発表者16名が、主張の論旨はもとより、論調も含めて、全員の個性が光る、大変素晴らしい大会となりました。当日、大勢の聴衆が見守るとても緊張した雰囲気の中発表された、皆さんの勇気とこれまでの努力を称えたいと思います。

皆さんは、この日のために原稿を推敲し、何度も何度も練習を重ねてきたことと思います。皆さんの発表は、家族のこと、挨拶のこと、言葉のこと、座右の銘のこと、折り紙のこと、自分が育ってきた環境のこと、自分の思いや疑問など日常生活のワン・シーンを切り口としたパーソナルなテーマからロボット技術等の進歩、老老介護、いじめ、不登校、食品ロスなどの社会問題まで、とても幅広い題材から自分の主張を展開していました。題材を効果的に取り上げながら、自分自身の気持ちと向き合い、自分自身の生き方について自分の言葉で語る力強さがありました。

皆さんが取り上げた題材は、今の時代を生きる私たちが直面している課題、あるいは、これからを生きる皆さんが対応を迫られるであろう課題でもあり、審査員の一人として改めてその内容について深く考えさせられました。おそらく当日会場におられた誰もが、中学生らしい鋭い感性としなやかな心から発せられるメッセージに心を打たれたのではないでしょうか。

審査についてですが、論旨と論調の二つの観点から５名の審査員で審査をいたしました。その結果につきましては、この作品集に掲載されているとおりですが、どの主張も甲乙つけがたく審査員一同、審査には大変頭を悩ませました。その中でも、最優秀賞を受賞された　登別明日中等教育学校の小路藍花さんの主張は、鋭い感性が感じられ、命の重みを感じさせるインパクトとリアリティがありました。論旨に一貫性があり、構成もしっかりしており、論調においても説得力がある話し方で、話しぶりに熱意と迫力が感じられました。

優秀賞の３名の皆さんにつきましては、最優秀賞とは僅差であり、今後、様々なステージでのご活躍を期待しています。奨励賞になった11名の皆さんも、心に残る主張をされておりました。各地区を代表して出場している皆さんは、自分の主張を聴衆に届ける論調に目を見張るものがありました。

最後になりますが、本大会のために熱心にご指導された先生方、温かく励ましてくださったご家族の皆様、この大会運営にご尽力された北海道青少年育成協会の皆様、そして、この大会に携わっていただいたすべての皆様に心から感謝申し上げますとともに、今回出場された中学生の皆さんのご活躍を祈念し、全体講評といたします。

全道各地から選ばれた代表16名の皆さんに、素晴らしい主張発表をしていただきました。お一人お一人の講評をさせていただきます。

１　五十嵐　彩佳 さん　　テーマ「夢をかなえる」

テレビで見たロボットの近未来化のニュースに抱いた疑問から主張を展開し、ロボットの社会進出に対する不安と、介護施設の訪問で目にしたことや感じたこと、考えたことを丁寧にまとめていました。「人の心と手のあたたかさをしっかり持ってこれからの未来を創り出していきたい」「夢をかなえるのは私たちだ」という決意は強く心に響いてきました。

２　岸本　慶介 さん　　テーマ「アウトドア、そして家族」

アウトドアに連れて行ってくれた父の姿や焚火を前にした父との会話などから心に感じたことをまとめ、家族との絆を感じさせてくれるアウトドアへの感謝が伝わってくる主張でした。あまり親と会話をしない思春期でも、心をオープンにできる焚火の前で父と心を合わせられた気がした岸本さんの正直な気持ちが感じられました。

３　谷内　　楓 さん　　テーマ「いじめと僕の夢」

小学校のときに受けたいじめから救ってくれた担任の言動から、自分の夢を見付け努力を続ける谷内さんの姿勢に心を打たれました。理不尽ないじめの理由、自分と家族が否定された怒りと悔しさ、恩師であり理想である担任の一つ一つの言葉や行動、教師になるという夢に向かって努力を続ける谷内さんの姿勢のどれもが、聴衆を引き付ける主張でした。

４　佐藤　志保里 さん　　テーマ「強い意志をもって」

自分の中のトップアスリート像と全く正反対の自分が、テレビ番組の松井選手の姿から、明確な目標と強い意志をもつことの大切さを知りました。自分を変えようと真面目に努力する姿勢がよく伝わってきました。一つ一つの目標に強い意志をもって全力で向かおうと決意した佐藤さんを応援したくなる気持ちがわいてくる主張でした。

５　小路　藍花 さん　　テーマ「『命をいただく』ということ」

多くの人とは異なる自分の育ってきた環境は両親の強い願いがあること、命は多くの命で成り立っていること、鶏の解体から命の重さを実感したこと、食品ロスは一人一人の意識で変えられることなどについて、力強い論調で主張していました。人間は自然と共に生きていることや我々は多くの命に支えられ新しい命を育んでいく存在であることを、一貫した論旨で述べられ感銘を受けました。

６　鈴木　　佑 さん　　テーマ「なりたい自分になるために」

何が起きてもおかしくない日常、困難に直面したとき優しい人でありたい、周りの人を助けることのできる人でありたいと強く願う鈴木さんが、デパートでなりたい自分とは程遠い行動をとってしまいます。「君たちはどう生きるか」と出会い、弱い自分を見付けられたこと、自分と向き合い弱さを受け入れ悩むことに感謝し、なりたい自分になるという決意が伝わる主張でした。

７　矢野　なずな さん　　テーマ「小さな一歩」

ニュースで知った老老介護のことから、我々にいつ起きてもおかしくない問題だと気付き、今、自分ができることを考えることで主張が展開していきます。社会にある多くの問題を知り、自分ができる小さな一歩を一人一人が考え、その一歩を多くの人が踏み出すことで社会がより良くなるという考えは、シンプルですが、大切なことだと思いました。私自身の踏み出せる一歩は何か、考えさせられました。

８　土岐　羅求 さん　　テーマ「さびしさを大切に」

冒頭の「四億年前、陸に上がろうとした一匹の魚がいました。」と、最後の「群れを離れ、一人で陸に上がった魚はそこで何を見たのでしょうか。」が反照法的に使われ、主張が締まりました。人とのつながりを大切にすることが強調されがちですが、一人でいることは、自分を見つめ直すことであり、自分を知ることにつながり、自分であり続ける大切さが伝わりました。

９　山森　隼人 さん　　テーマ「思いやりの先に」

「リスペクトアザース」と「我以外皆我が師」という二つの言葉といくつかのエピソードを交えながら主張が展開されました。自分以外の人を尊重し敬意を払うことと、自分以外は皆、自分に何かを教えてくれる先生だという謙虚な気持ちというそれぞれの言葉の意味から、相手と自己を見つめ「思いを遣う」大切さが伝わりました。

10　関根　璃音 さん　　テーマ「あいさつの力」

使命感からあいさつをしていた関根さんが、ドライブスルーでのできごとを通して、気持ちを込めた大きな声と笑顔であいさつをすることの大切さに気付き、あいさつを返してくれないウォーキング中のおじさんからついにあいさつを返してもらったエピソードが心に残ります。まさに「あいさつは互いを思いやる関係をスタートする第一歩」だと感じました。

11　岡野　心優 さん　　テーマ「当たり前を常識に」

当たり前は使う人によって意味が変わること、当たり前はその人の価値観や置かれた環境によって違ってしまうことに対して、日常の中にある当たり前に疑問をもち、良い当たり前が増え、常識になるようにこれから過ごしていく岡野さんの決意を感じました。反照法を使うことによって「当たり前は変えなくてはいけない」という主張にまとまりが見られました。

12　斉藤　夏華 さん　　テーマ「なりたい自分になるために」

コンプレックスだらけで自分のことを好きになれない斉藤さんが、自分とは正反対で何でもできる弟の野球の練習に取り組む姿勢から、本気で頑張ることの大切さに気付きました。自分と向き合い、頑張ることが自信となって少しだけ自分が好きになったことを素直な表現で主張していました。本気で努力する大切さが伝わってきました。

13　房田　心玖 さん　　テーマ「過去を乗り越えて」

小学校高学年の不登校を克服していく過程を、自分自身の気持ちと向き合いながら表現していました。自分がどう思われているのか不安になったり、人の目が気になったり苦しい胸の内が語られていました。克服した今でも、人を信用することや裏切りが怖いというトラウマを抱えながら生活している姿に心が痛みます。両親が不登校から救い出してくれたことへの感謝の気持ちが伝わる主張でした。

14　堀　　来羽 さん　　テーマ「十年後の私へ」

冒頭の「十年後の私へ」と最後の「十年後の私へ」の変化が、堀さんの主張を明確にしています。さらに、「私は、夢はもたなくても良いと思います。」に、何を主張するのだろうと興味をもちました。まだ世の中のことを知らな過ぎて、少ない引き出しの中から将来を決めてしまうのはもったいないから、自分の引き出しを増やすことを大切にしたいという中学生らしい感性が光る主張でした。

15　吉田　千玲 さん　　テーマ「普通」

愛情をもって妹さんの特性を説明しながら、普通とは何か、普通の基準は誰が決めるのかについて表現していました。自分と違う人を「普通じゃない」と思うのか、「普通だ」と思うのかは、相手ではなく自分自身であることや、一人一人違うのが当たり前で互いに認め合うことが大切だということ、見方が変われば感じ方も変わることなど、妹さんへの愛情と吉田さんが考えたことが伝わる主張でした。

16　野月　あすみ さん　　テーマ「情報発信の大切さ」

折紙の創作活動のことを取り上げながら、情報発信の大切さを訴えていました。情報発信というと、インターネットやＳＮＳを頭に思い浮かべますが、野月さんは人と人とが向かい合い、顔を合わせてコミュニケーションをとることと積極的に外部に発信しようとするアクションが大切だと主張していました。折紙の創作活動ができる充実した環境にある自分を客観的に見た上での主張でした。

参考

令和元年度「第41回少年の主張全国大会～わたしの主張2019～」
内閣総理大臣賞受賞作品

心の扉

東京都　筑波大学附属視覚特別支援学校（中学部）　1年
藤田　大悟

「視覚障害はただ目が悪いだけで、努力すれば健常者と同じように勉強できる。」

普通小で日々を過ごす中、こんなことを思っていました。今思えばその気持ちの後ろには「みんなに遅れを取らないように頑張らなきゃ。」という一心で自分を追い詰め、クラスから自分を守ろうとする見えない鎧を身につけていたのだと思います。

六年生の春。鎌倉への遠足での出来事です。鎌倉は山道も多いことから当初は行くことに乗り気ではなかったのですが、思い出作りと思って行くことにしました。

「班全員で最終チェックポイントを回り終わること。終わった班からお弁当。」というルールで遠足がスタート。全員がチェックポイントめがけ走り出し、班のみんなもどんどん進み、僕との距離は離れていきました。

「僕が視覚障害ってこと、知ってるよね。少し待ってよ。」

と思いましたが、次第にみんなの姿も鎌倉の山道の中に消えていきました。

やっと合流した最終チェックポイントで、

「お前のせいで回るのが遅くなったじゃないか。」

と言われ、愕然としました。

「ごめん。」

この言葉で精一杯でした。遠足終了。

僕は遠足の後、

「みんなの気持ちもわかるけど、あんなことを言われて解決しないまま卒業したくない。」

とじっくり解決の道を探っていました。ふと、

「僕の見え方、配慮して欲しいことを皆に説明したことあったかな？」

と考えた末に「自分」をスピーチで伝えることにしました。

十一月七日、ついにその日が来ました。まず器具を使って僕の見え方を体験してもらうと、

「大悟ってこんなに見えてなかったんだ。」

という第一声が飛び交いました。見え方さえ分かり合えていないことを知り、今まで説明していなかった自分が情けない反面、話せて良かった、という安心感が複雑に混じりました。次に配慮して欲しいことなどを伝えてスピーチが終了。

この日は僕にとって貴重な一日となりました。なぜなら、予想以上にわかり合えていなかったことを知り衝撃的だった一方で、現状を伝える大切さを痛感したからです。

そして、スピーチから一ヶ月経った十二月八日、音楽会を迎えました。僕は学年代表としてピアノ伴奏をすることとなり、日々練習に励みました。

本番当日、保護者を前に異様な緊張に包まれた体育館で演奏が始まりました。不覚にも数小節の音が抜けてしまいました。が、日々練習を重ねたことで幸運にも伴奏を再開できました。しかし伴奏終了後は、あれだけ練習したのにという、やりきれない思い、合唱を台無しにしたという罪悪感、鎌倉の時のように皆から責められ孤独を味わうのではないかという恐怖、様々な思いが一気に押し寄せます。今までにないほどの涙が溢れました。

恐る恐る教室へ帰るとなんと予想に反してみんなが励ましの声をかけてくれたのです。この時僕は辞書を引いても適する言葉が見つからないほど幸せな気持ちでした。スピーチで皆が本当の僕をわかってくれ、一人のクラスメイトとして受け入れてくれた、と肌で感じられたからです。同時に、皆に対して構えていた僕の中にあった見えない壁も崩れていきました。この瞬間、気持ちが初めて通じ合い、障害という枠を超え認め合っている仲間の証拠を感じられました。

この体験で新たなことに気づきました。

それは、「自分が障害者だから自分を理解してもらおう」と相手にばかり求めるのではなく、自分も心を開いて相手を受け入れる必要があるということです。このことは当然のことのようですが、その一歩を踏み出すのはとても勇気のいることでした。だからこそこのような体験ができてとても嬉しいです。この体験を心のノートに太文字で書き記しておきたい。

「心の扉を開こう。そして、Let`s チャレンジ。」

資　料

大会のねらい

少子高齢化、国際化、情報化の急速な進展等、社会や環境が大きく変化する現代社会にあって、次代を担う少年には、心身ともに健康で他者を思いやる心をもち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などとともに、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらう力などを身につけることが大切であることから、少年が社会に向けての意見、未来への希望などを発表してもらう機会を設け、少年の健全育成及び非行防止に対する道民の理解を深める契機となることを目的としています。

(国際児童年の昭和54年から毎年開催)

大会のあらまし

■総合振興局・振興局地区大会　地区代表者の選出

■全　道　大　会　地区代表者16名の参加
最優秀賞１名（北海道・東北ブロック代表選考に推薦）
優秀賞３名を選定
（上記４名には、併せて「北海道コンサドーレ札幌賞」を贈呈）

■全国大会出場者の選出

全国を５つのブロック（北海道・東北／関東・甲信越／中部・近畿／中国・四国／九州）に分けて都道府県代表者の主張原稿及び録音テープを審査し、各ブロックの代表者12名を選出

■全　国　大　会

令和元年12月８日(日)、東京都（国立オリンピック記念青少年総合センター）において開催
ブロックの代表者12名参加（内閣総理大臣賞ほか各賞決定）

審査員

■審査員長

立　花　和　実（北海道中学校長会幹事／伊達市立伊達中学校長）

■審 査 員（50音順）

井　上　規　之（北海道教育庁生涯学習推進局生涯学習課主幹）
杉　本　和　弘（(公財) 北海道青少年育成協会理事／北海道新聞社編集局くらし報道部長）
難　波　雅　弘（北海道PTA連合会事務局次長）
藤　岡　正　勝（北海道環境生活部くらし安全局道民生活課青少年担当課長）

令和元年度「少年の主張」総合振興局・振興局地区大会開催状況

応募校数　343校　　応募者数　33,890名

総合振興局・振興局名	開催日	開催場所	発表者（人）	審査員（人）	聴取者（人）
空知総合振興局	7月18日(木)	雨竜町立雨竜中学校	16	5	80
石狩振興局	7月　4日(木)	道庁赤れんが庁舎　１号会議室	7	4	60
後志総合振興局	7月26日(金)	倶知安町公民館（文化福祉センター内　2F）大ホール	15	5	120
胆振総合振興局	7月19日(金)	むろらん広域センタービル３階会議室Ａ	11	3	38
日高振興局	7月　6日(土)	日高振興局４階講堂	7	4	60
渡島総合振興局	6月14日(金)	鹿部中央公民館　大ホール	13	4	170
檜山振興局	6月20日(木)	江差町文化会館	16	5	230
上川総合振興局	7月17日(水)	上川合同庁舎　３階講堂	23	5	72
留萌振興局	7月29日(月)	留萌合同庁舎　２階講堂	8	5	66
宗谷総合振興局	7月18日(木)	稚内市立稚内南中学校	11	5	266
オホーツク総合振興局	7月17日(水)	網走市立第二中学校	6	3	214
十勝総合振興局	7月　6日(土)	十勝総合振興局　講堂	19	4	83
釧路総合振興局	7月29日(月)	北海道立釧路高等技術専門学院　講堂	8	5	61
根室振興局	7月　8日(月)	根室市総合文化会館　小ホール	10	6	200
合　　計			170	63	1,720

令和元年度「少年の主張」実施要領

１　目　的

少子高齢化、国際化、情報化の急速な進展等、社会や国際的な環境が大きく変化する現代社会にあって、次代を担う少年には、心身ともに健康で他者を思いやる心をもち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められている。そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などとともに、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらう力などを身につけることが大切であることから、少年が社会に向けての意見、未来への希望などを発表する機会を設け、少年の健全育成及び非行防止に対する道民の理解を深める契機となることを目的とする。

２　主　催

北海道、公益財団法人北海道青少年育成協会、独立行政法人国立青少年教育振興機構

３　主　管

総合振興局・振興局地区大会は各総合振興局・振興局、全道大会は環境生活部とする。

４　対　象

北海道内に在住の中学生

５　名　称

少年の主張

６　実施方法等

（１）　総合振興局・振興局地区大会

各総合振興局・振興局管内（札幌市を除く）の中学生を対象に意見を主張する場を設定する。

ア　実施方法

大会形式により実施する。

イ　募集

・教育局の協力を得て、管内市町村教育委員会等を通じて、各中学校に対し、周知を図る。
・各市町村単位、各学校単位で実施している主張大会、弁論大会等と連携した募集の他、自由公募などにより募集する。
・広報媒体を利用した募集に努める。

ウ　発表内容

・社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など
・家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友だちとの関わりなど
・テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など

上記のような内容で、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどを少年らしい自由でユニークな、飾り気のない言葉でまとめたもの。

※　商業的な固有名詞の使用は極力避けることとする。
※　パフォーマンスや小道具の使用を取り入れてもよい。

エ　発表時間

５分程度（400字詰原稿用紙４枚程度）

※全国大会の規定が、学校名、氏名、タイトル等の部分は除く「作文本文の出だし」から「作文本文の終わり」までで４分30秒～５分30秒であるため、振興局地区大会代表者の時間が範囲に入らない場合は、全道大会出場に向けて必ず時間調整を行ってください。

オ　審査

・関係機関等に、選考に係る審査員の推薦を依頼する。
・審査により、順位付けし、最優秀者１名及び優秀者２名を決定する。

カ　審査基準

（ア）論旨

・鋭い感性で、新鮮な主張であるか。（中学生らしさ）
・新しい情報や視点があるか。
・個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
・提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。
・論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。

（イ）論調
・主張の内容が共感と感銘を与えているか。
・説得力ある話し方であったか。
・話し振りに熱意と迫力があるか。

キ　実施月

原則として７月の「青少年の非行・被害防止道民総ぐるみ運動強調月間」に実施する。

ク　表彰

・最優秀者１名及び優秀者等に対して賞状等を授与する。
・表彰に当たっては、賞状の他、副賞の授与、また、出場者数、地域の実情等に応じ、予算の範囲内で工夫して差し支えないこと。

ケ　推薦

最優秀者を全道大会出場者として、令和元年８月９日（金）までに、環境生活部に推薦する。

なお、最優秀者が全道大会に出席できない場合は、順位に基づき優秀者等から上位者１名を推薦する。

また、総合振興局・振興局地区大会の開催内容を記載した資料も添付すること。

（2）全道大会

各総合振興局・振興局からの推薦者及び札幌市中学校長会からの推薦者２名を対象に意見を主張する場を設定する。

ア　実施方法

大会形式により実施する。

イ　発表内容

総合振興局・振興局地区大会と同様

ウ　発表時間

総合振興局・振興局地区大会と同様

エ　審査

・関係機関等に、選考に係る審査員の推薦を依頼する。
・審査により、順位付けし、最優秀者１名及び優秀者等を決定する。

オ　審査基準

総合振興局・振興局地区大会と同様

カ　実施月日

令和元年９月５日（木）開催の「北海道青少年育成大会」において実施する。

キ　表彰

・最優秀者１名及び優秀者等に対して賞状及び副賞を授与する。
・入賞者以外には、奨励賞を贈呈する。

ク　推薦

最優秀者は全国大会出場候補者として、独立行政法人国立青少年教育振興機構に推薦する。

なお、最優秀者が全国大会に出席できない場合は、順位に基づき優秀者等から上位者１名を推薦する。

ケ　その他

発表者及び随行者には旅費を支給する。

７　その他

・主張発表者の原稿は400字詰原稿用紙（Ａ４）縦書きで、本人自筆による原本（障害等による場合はワープロ可）とする。
※全道大会出場者については、Ａ４サイズ以外の原稿では出場できません。異なるサイズの場合は、Ａ４サイズに書き直した原稿が必要となりますので、ご留意ください。
・応募作品は、未発表のものに限る。
・応募された作品は、原則返却しないこととし、北海道に帰属するものとする。
・原稿の書き出しについては次のとおりとする。
・総合振興局・振興局開催要領(案)、各市町村教育委員会教育長あて通知文、審査員の委嘱関係様式、賞状文及び推薦書、承諾書（個人情報関係）は別紙のとおり

１行目	タイトル
２行目	北海道　学校　学年
３行目	氏名
４行目	作文
～	

「少年の主張」全道大会　歴代最優秀賞並び優秀賞受賞者名簿

年度	最優秀賞（北海道知事賞）		全国大会	優秀賞（北海道教育委員会教育長賞、北海道PTA連合会会長賞、北海道青少年育成協会会長賞 H22～）			
	学校名	氏　名		学校名	氏　名	学校名	氏　名
S54	利尻町立沓形中学校	池原広文	出　場 総務長官賞				
S55	根室市立光洋中学校	小林優美	出　場				
S56	様似町立様似中学校	川上美穂子					
S57	初山別村立豊岬中学校	高橋未央	出　場				
S58	鹿追町立鹿追中学校	最上佐緒里					
S59	厚沢部町立厚沢部中学校	後藤　晃					
S60	和寒町立和寒中学校	高岡智扇		札幌市立手稲東中学校	庄田香織	更別村立更別中央中学校	西川朋憲
S61	小平町立達布中学校	紅屋　優		美唄市立美唄中学校	堀川卓郎	稚内市立稚内南中学校	山崎直美
S62	鵡川町立鵡川中学校	伊藤奈美	出　場	音更町立音更中学校	佐々木詩津子	和寒町立和寒中学校	岡本百里
S63	砂川市立豊沼中学校	小林まるみ		増毛町立増毛第二中学校	上坂奈緒美	更別村立更別中央中学校	竹川　暢
H 1	江差町立江差中学校	中川昌子		釧路市立鳥取西中学校	薄井理砂	別海町立中西別中学校	臼井貴之
H 2	鹿追町立瓜幕中学校	高橋恵美子		旭川市立広陵中学校	三浦愛子	初山別村立有明中学校	新田千佳子
H 3	稚内市立稚内東中学校	森田　淳		中札内村立中札内中学校	中西志香	美幌町立美幌中学校	飯島紀子
H 4	弟子屈町立弟子屈中学校	横川　心	出　場 文部大臣賞	白老町立虎杖中学校	中村有希子	江別市立江北中学校	藤城正興
H 5	生田原町立生田原中学校	仁木利沙子		浦河町立浦河第一中学校	高田牧生	別海町立中西別中学校	林　美穂
H 6	生田原町立生田原中学校	前島由衣	出　場	旭川市立六合中学校	中村沙織	余市町立西中学校	高山仁美
H 7	幕別町立糠内中学校	中村郁洋	出　場	標茶町立磯分内中学校	岡崎奈未子	札幌市立新陵中学校	出林裕佳
H 8	滝川市立明苑中学校	紺野友里子	出　場	標茶町立磯分内中学校	藤本智子	富良野市立山部中学校	寺井正美
H 9	中標津町立広陵中学校	谷口麻衣		七飯町立大中山中学校	竹安玄太	苫前町立古丹別中学校	中嶋卓広
H10	本別町立勇足中学校	岡本あすか		札幌市立北都中学校	野原　梓	天塩町立啓徳中学校	大岩奈々恵
H11	根室市立柏陵中学校	分部史織		江差町立江差中学校	柴田　優	中富良野町立中富良野中学校	杉原　咲
H12	稚内市立宗谷中学校	熊谷慶子	出　場	釧路市立北中学校	大井里紗	北広島市立西部中学校	畠山直子
H13	新冠町立新冠中学校	中村みなみ		虻田町立虻田中学校	佐々木千恵	猿払村立拓心中学校	藤井美咲
H14	共和町立共和中学校	本間絵美		釧路市立武佐中学校	佐藤くる美	恵山町立東光中学校	佐藤亜未
H15	釧路市立美原中学校	佐藤妃奈		岩見沢市立上幌向中学校	森谷紀治	歌登町立志美宇丹中学校	渡辺のぞみ
H16	熊石町立熊石第二中学校	山脇恭子		上富良野町立東中中学校	熊谷佳苗	鶴居村立鶴居中学校	木村友紀
H17	新十津川町立新十津川中学校	三吉莉湖		歌登町立歌登中学校	金子佳美	せたな町立大成中学校	正村早紀
H18	北斗市立石別中学校	山田亮一	出　場	岩内町立岩内第一中学校	松山亜莉紗	枝幸町立志美宇丹中学校	渡辺ともみ
H19	枝幸町立志美宇丹中学校	渡辺ともみ		当別町立西当別中学校	萩原有希	伊達市立長和中学校	本田舞音
H20	岩内町立岩内第一中学校	熊野遥華		幌延町立問寒別中学校	佐藤慎之介	池田町立池田中学校	新居詩穂
H21	寿都町立寿都中学校	石王凱騎		礼文町立香深中学校	中島佳奈子	千歳市立富丘中学校	中田翔哉
H22	遠軽町立生田原中学校	阿部　愛		北海道教育大学付属釧路中学校	恒川礼奈	増毛町立増毛中学校	加藤修人
				帯広市立清川中学校	横山くるみ		
H23	別海町立中西別中学校	盛合　樹		苫前町立古丹別中学校	永井星奈	釧路市立幣舞中学校	田名部あゆみ
				栗山町立栗山中学校	濱谷珠美		
H24	猿払村立拓心中学校	熊谷春奈		厚岸町立真龍中学校	山田　唯	札幌市立月寒中学校	安田りな
				遠別町立遠別中学校	丸山美月		
H25	帯広市立川西中学校	畠山優輝		札幌市立平岡中央中学校	高野大河	釧路市立鳥取西中学校	米内貴志
				江別市立江別第二中学校	最知なるみ		
H26	稚内市立稚内南中学校	熊谷七海		釧路町立富原中学校	山岸永和	帯広市立帯広第五中学校	深町陽奈
				鷹栖町立鷹栖中学校	高木倖凪		
H27	北海道教育大学附属札幌中学校	前田ほの香		千歳市立勇舞中学校	山田萌未	帯広市立川西中学校	西野侑未
				苫小牧市立緑陵中学校	吉岡美月		
H28	白糠町立庶路中学校	松橋愛美		豊富町立豊富中学校	伊藤佑茉	標津町立標津中学校	上田礼芽
				長沼町立長沼中学校	倉田友美		
H29	白糠町立白糠中学校	阿部はるか		芦別市立啓成中学校	渡部胡桃	旭川市立神居東中学校	若林千夏
				新ひだか町立静内第三中学校	坂本安侑子		
H30	洞爺湖町立洞爺中学校	毛利郁也		厚岸町立真龍中学校	車塚花瑠香	岩見沢市立東光中学校	藤塚麗瑠
				中標津町立広陵中学校	楓川奈央	※美幌町立北中学校	田元　克
R01	登別明日中等教育学校	小路　藍花		帯広市立帯広第四中学校	吉田千玲	北斗市立茂辺地中学校	房田心玖
				岩見沢市立清園中学校	谷内　楓		

※H30＝北海道150年記念　特別賞

令和元年度

「少年の主張」全道大会発表作品集

発　行　公益財団法人北海道青少年育成協会

〒060-0005
札幌市中央区北５条西６丁目１番地23　第二道通ビル
TEL（011）231－6451　　FAX（011）231－6457
URL　http://www.ikuseikyo.jp/
E-mail　youth@ikuseikyo.jp

―青少年の心を育てるキャンペーン―

「子どもは、社会を映す鏡」。
そんな考え方に立ってみると、私たち大人から、
先にしなければならないことがたくさんあります。
まず、大人自身が変ること。
そして、子どもたちを温かく見守り、支えあげること。
さあ、はじめましょう。

できることから、大人から

本事業は独立行政法人国立青少年教育振興機構より委託を受けて実施しております。